

## 2 章 カリキュラム・マネジメントの視点から考える先行事

### 例と事例開発の枠組み

#### 3-2-1 カリキュラム・マネジメントの視点から考える学校と地域の連携・協働のあり方

松山 鮎子(大阪教育大学)

#### 中教審答申にみる学校と地域の連携・協働

##### 学校と地域の連携・協働が求められる背景

今日の社会経済、とくに就労構造の変容や価値観の多様化などによって、人々の生活が不安定の度合いを深め、さらに急速な少子高齢人口減少、人生 100 年時代の到来、という未曾有の人口構造の変化に見舞われて、社会に悲観論が蔓延する事態が招かれている。こうした社会状況を背景として、いま改めて、一人ひとりが社会に位置づき、豊かに生を全うすることとそのための支援のあり方を問い返し、またこの社会をどのように次の世代へとつなげて、社会の持続可能性を高めるのが課題となっていると考えられる。さらに、昨今の新型コロナウイルス感染拡大にともなって休校措置がとられたように、学校教育・社会教育のみならず、社会全体で人々のつながりのあり方を再検討することが求められている。

このような社会的な要請をふまえて既存の教育制度の体系に組み込まれたのが、人生 100 年時代の初期に位置づけられる学校教育において、生涯学び続け、主体的に社会を担っていく存在として自己を形成し続けるための基礎的な力を養うことであるととらえられる。その一例が、2020（平成 29）年から小学校で実施されている新学習指導要領で、その基本的な考え方は、子どもたちの学びが学校では完結しないことを前提に、生涯学び続ける基礎的な力を養うということにある。また、これに先立って 2015（平成 27）年 12 月には、中央教育審議会から文部科学大臣へ次の 3 つの答申が提出された。

- ・「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」
- ・「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)」
- ・「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)」

これらはいずれも、既述のような社会の変化にともなって、従来のように教育を学校の中だけで完結させるのではなく、社会総掛かりでの教育の実現を図ることを目指した内容となっている。特に、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)」では、すべての公立学校におけるコミュニティ・スクール導入の努力義務化が提言されている。このコミュニティ・スクール構想には、高齢者をはじめとした大人が、子どもたちの育成にかかわることで、子どもたちを主体的で探究的な存在へと育み、この社会を持続可能なものへと組み換えようとする、さらにそうした実践を通して、地域社会に生きる大人自身のあり方も自律的な存在へと組み換えようとする方向性が示されていると考えられる。

### 答申に示された「協働」のあり方

では具体的に、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)」において、学校と地域の「協働」はどのようなものととらえられているだろうか。まず、答申全体を流れている理念は、次のように述べられている。「未来を創り出す子供たちの成長のために、学校のみならず、地域住民や保護者等も含め、国民一人一人が教育の当事者となり、社会総掛かりでの教育の実現を図るということであり、そのことを通じ、新たな地域社会を創り出し、生涯学習社会の実現を果たしていくということである」(中央教育審議会 2015a:1)。ここでは、学校とは直接関わりのない地域住民なども含めたすべての人々が、子どもの教育を自分ごとにして、主体的にそこに関わることで、子どもたちの学びと成長を支える地域の基盤を再構築するという理念が示されていると考えられる。

このような理念の下で学校と地域がなぜ連携する必要があるのか、答申ではその理由を5つの観点から説明する(中央教育審議会 2015a:8-9)。

#### ①これからの時代を生き抜く力の育成の観点

子どもたちが自立した人間として、他者と協働しながら未来を創り出し、課題を解決していく力を身につけるためには、信頼できる大人との多くの関わりを通して、多様な経験を重ねていくことが

必要である。教育に、地域住民や企業、NPO など様々な専門知識・能力を持った地域人材が関わることで、子どもたちに、実社会に裏打ちされた幅広い知識・能力を育成することができる。

## ②地域に信頼される学校づくりの観点

今日の複雑化、困難化する学校の課題を解決していくためには、学校が地域と積極的に向き合うことで、信頼される学校づくりを進めていく必要がある。そうすることで、地域住民や保護者等が学校運営に対する理解を深め、そこに積極的に参画することで、学校をより良いものにしていくという当事者意識が高まり、子どもの教育に対する責任を社会的に分担していくことができるようになる。

## ③地域住民の主体的な意識への転換の観点

子どもの教育に対する責任を地域住民が家庭や学校とともに分担していくためには、地域住民が「互助・共助」の視点を持って、自ら生活する地域を創っていくという「主体的な意識」をもつことも必要である。こうした意識の醸成のために、「学び」を通じて新たな人間関係を作ること、また、子どもたちを社会の主体的な一員として受け入れ、より幅広い層の地域住民が参画し、地域の課題や地域の将来像などについて議論を重ね、住民の意思を形成し、さまざまな実践へとつなげていくことが重要である。

## ④地域における社会的な教育基盤の構築の観点

地域社会を構成する一人一人が当事者としての役割と責任を自覚し、主体的・自主的に子どもたちの学びに関わり、支える中で、ふるさとに根付く子どもたちを育て、地域の振興・創生にもつなげていく。そのために社会教育の体制を整備し、強化していくことが重要である。

## ⑤社会全体で、子供たちを守り、安心して子育てできる環境を整備する観点

困難を抱えた保護者や子どもの孤立化に対応する観点から、すべての子どもたちを守り、支える地域社会のあり方が問われている。また、幅広い分野における女性の活躍を促進していくために、学校と地域とが連携、協働することで、安心して子育てできる環境を整備し、育児と仕事を両立しやすい社会を実現していくことが必要である。

以上のような観点から、本答申では、学校と地域の「パートナーシップ」を発展させることの必要が指摘されている。パートナーシップとは、学校内外の関係者や関係機関が連携・協力することで、単独では実現が難しい事業の目的を効果的に達成する仕組みや連合体を指す。また、パートナーシ

ップにおける関係性は、上下関係やどちらか一方に権限が偏っているというのではなく、各パートナーがそれぞれのアイデンティティを保持しており、相互に対等な権限関係にあることが前提となる。このような関係における共同が、「コラボレーション」すなわち「協働」と呼ばれるものである。つまり、新たな答申では、どちらか一方が自らの目的や利益のために相手を「利用」「活用」するようなものではなく、子どもの豊かな成長を支えるという共通の目的を軸に、学校と地域が対等な関係で結びつき、双方にとって意味のある取り組みが発展していくことを重視しているのだと考えられる。図3-9は、そのような多様な主体どうしの協働関係に基づいて、地域全体で子どもの成長を支える仕組みを概念図として示したものである（中央教育審議会 2015b:5）。

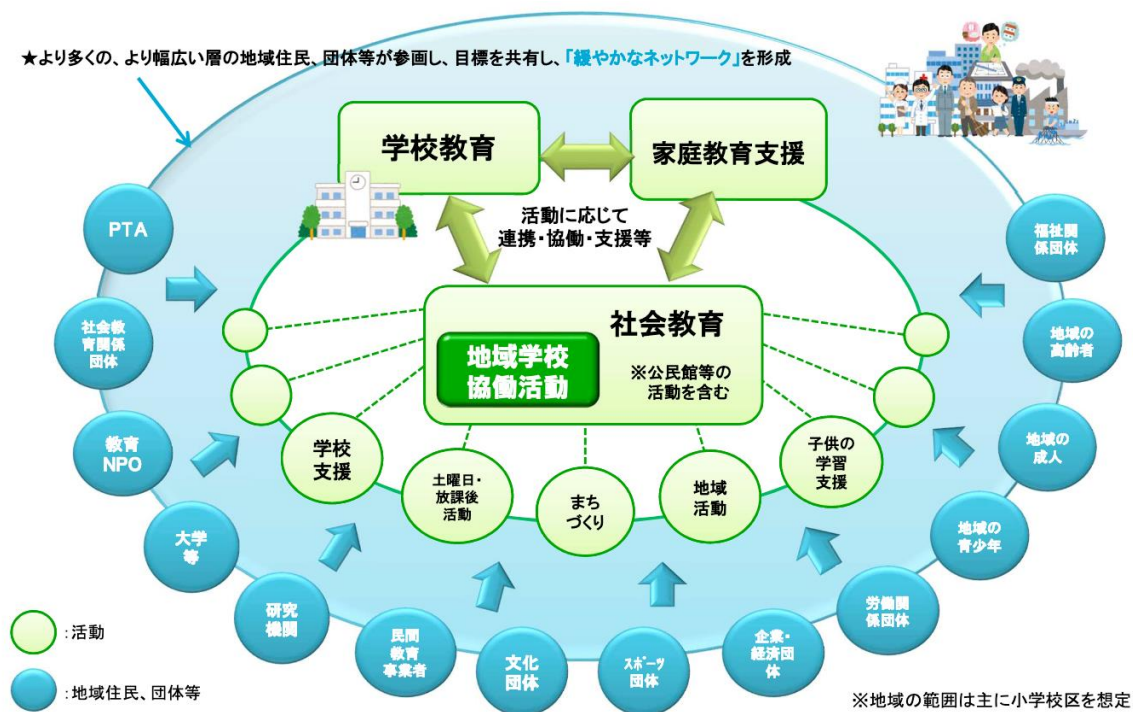


図 3-9 地域全体で未来を担う子供たちの成長を支える仕組み（活動概念図）

### 学校と地域の連携・協働を推進するカリキュラム・マネジメントとは

2016（平成 28）年に提出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、カリキュラム・マネジメントの側面の一つとして、「教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること」が示されている（中央教育審議会 2016:24）。また、カリキュラム・マネジメントにおいて、「家庭・地域とも子供たちにどのような資質・能力を育むかという

目標を共有し、学校内外の多様な教育活動がその目標の実現の観点からどのような役割を果たせるのかという視点を持つこと」、そのために、「園長・校長がリーダーシップを発揮し、地域と対話し、地域で育まれた文化や子供たちの姿を捉えながら、地域とともにある学校として何を大事にしていくべきかという視点を定め、学校教育目標や育成を目指す資質・能力、学校のグランドデザイン等として学校の特色を示し、教職員や家庭・地域の意識や取組の方向性を共有していくことが重要である」と述べられている(中央教育審議会 2016:24)。このように、学校と地域のパートナーシップを発展させ、協働の取り組みを推進していくことは、教育の質を高めるカリキュラム・マネジメントを実現していく上でも欠かせない要素ととらえられていることが分かる。

では、そのような観点からカリキュラム・マネジメントを行なっていくにあたり、具体的にどのようなことに留意する必要があるだろうか。本稿ではこれについて、筆者が 2013(平成 25)年から 6 年間携わった「東大キッズセミナー」を取り上げながら考えることとする。

#### 「東大キッズセミナー」とは

「東大キッズセミナー(以下、キッズセミナー)」は、東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室と、千葉県柏市との連携により実施してきた事業である。本事業の開催地は、千葉県柏市の柏第六小学校と高柳地区の 2 地域で、対象は両地域の小学校に通う子どもたちであった。このうち、柏第六小学校では、企画運営にあたって、大学、学校、行政、地域のシニアボランティアが「キッズセミナー実行委員会」を結成し、準備段階から本番当日まで協働で事業を進めてきた。一方、高柳地区では、地元の高齢者らが「多世代交流型コミュニティ実行委員会」を組織し、地域で子どもを見守り育てる活動に日常的に取り組んでいることから、セミナーも同実行委員会の活動の一部に位置づけられ、大学と行政、学校がサポート役にまわるかたちで開催された。

セミナーの参加者はいずれの地域も毎年度 100 名以上となり、その意味で、大学生やシニアボランティア、教員、行政関係者など、さまざまなアクターが協働し、子どもたちのために学びの場を提供する取り組みとして定着していたといえる。とりわけ本事業では、地域とは日頃縁の薄い大学生世代が講師やスタッフになることで、彼らが高齢者と子ども、高齢者と子育て世代とのつなぎ役を担い、多世代からなる新たなコミュニティをつくり出している点が特徴であった。

ここでは、その取り組み内容の一端を、2016 年度及び 2017 年度の柏第六小学校における実践を取り上げて紹介することとしたい。

## 事業の背景と位置づけ

柏第六小学校は、1964(昭和 39)年、豊四季台団地の造成に伴い設立された小学校である。全 103 棟、戸数 4,666 戸の大規模団地の一画に建てられた同校は、元々、この団地に住む子どもたちのための学び舎であった。そして当時、団地にファミリー層が多く移り住んだことで、ここに学校を中心としたコミュニティが形成されることとなった。しかし、近年は、子どもたち世代が独立し家を出たことで、団地の過疎化・高齢化が進み、独居のお年寄りの孤立が深刻な課題となっている。

そのような中、2013(平成 25)年より、豊四季台地区区内で柏市と社会福祉協議会、東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室との連携による「豊四季台くるるセミナー」が開始された。このセミナーの目的は、第一に、企業を退職した高齢者が第二の人生を肯定的にとらえ、生き生きと生活するために、生涯学習を通じて地域住民の間につながりをつくりだすことである。また、第二は、講座終了後の自主グループ活動によって継続的な社会参加を促すことで、一人ひとりが自分にできることを地域に還元していこうとする動きを生み出すことである。このような循環が、地域の中にもいくつも生まれることで、新たな人的ネットワークが構築され、コミュニティを持続可能なものにしていくというのが、セミナー全体を貫く考え方である。

キッズセミナーは、上記の「豊四季台くるるセミナー」から生まれた自主グループのメンバーが企画運営に加わることで、地域の中で子どもを育てることに意欲と思いのある高齢者が、実際に学校をはじめとするさまざまな組織、人と連携しながら一つの事業をつくりだす実践の場となっている。

既述のとおり、本事業の主体は、大学、学校、行政、地域のシニアボランティアにより結成された実行委員会である。この実行委員会では、大学が事務運営の中心となり、プログラムのアイデアの提供、講座の準備と運営、チラシの制作、名簿の管理といった役割を担っている。他方、学校は、参加申し込み票のとりまとめ、講座で使用する道具・材料の購入調達、当日の受付など、社会福祉協議会は、保険申請などの事務手続きと運営の補助、シニアボランティアはプログラムのアイデアの提供と当日の運営、柏市は全体の調整役を引き受け、それぞれの持ち味を生かした役割分担を行っている。

## 事業内容

次に、具体的な事業の内容を、実際のプログラムに即して説明する。本事業の各プログラムのアイデアは、主に講師役の学部生・大学院生が各々の専門分野や特技などを生かし、考案している。

毎回、4～10 講座ほどの企画が提示され、それらを実行委員会メンバーの話し合いで練り上げ、最終的に2～4 講座を実施する。ここでは、それらのプログラム作りで重視している点を①から③に分け、具体例として、2016(平成28)年8月の活動を取り上げながら説明する。

### ①「静」と「動」の活動の組み合わせ

まず、表3-6は、2016年度のプログラム内容である。例年セミナーは、2日間、午前と午後1講座ずつで開催される。また、その際、簡単な工作と体を動かす活動とを組み合わせ実施する機会が多い。というのも、1日2講座の場合、参加する子どもは、午前・午後と連続で受講することも多い。そこで、集中してものづくりをする「静」の活動と、思いっきり体を動かしエネルギーを発散する「動」の活動の両方をバランス良く体験できるよう構成を工夫しているのである。

なお、この「静」と「動」の組み合わせは、たとえば、「3.リフティング王への道～羽けりで遊ぼう」において、前半で羽けりの羽を工作し、後半でその完成物を使った対戦ゲームを行うというように、1つの講座の中でメリハリをつけるかたちをとることもある。

表3-6 キッズセミナーのプログラム内容(2016年度)

	講座タイトル	日時※	場所	講座のねらい	参加費
1	万華鏡のひみつ	2016年9月11日 10:00-12:00	柏第六小学校 体育館	・身近なものを使って、自らの手を用いて万華鏡を作成すること。 ・身近なものに潜む科学の存在を知ってもらうこと。 ・ものづくりを通して他学年や地域の人と交流をすること。	300 円
2	びっくり! 大きなかるだで遊ぼう!	2016年9月11日 13:00-15:00	柏第六小学校 体育館	・子どもたちがかるた遊びを楽しみながら、自分の住んでいる地域以外の地域に関心を持つ。 ・子どもたちがチーム内で協力し話し合いながら、かるた遊びを行う。	300 円
3	リフティング王への道 ～羽けりで遊ぼう	2016年8月29日 10:00-12:00	柏第六小学校 体育館	韓国の伝統的な遊びである羽けりを作りながら、異文化を体験する。 同時に、羽けりの遊び方を身に付け、身体を動かすことを目的とする。	300 円
4	決めろハイトス! みんなでジャグリング	2016年8月29日 13:00-15:00	柏第六小学校 体育館	・努力して練習することにより成功体験を得る。 ・練習を通し、異なる学年の児童同士で互いに協力し交流を図る。	300 円

※講座1および2は、台風の影響により、予定の開催日8月22日から9月11日へ変更となった。

## ②新たな学びへと好奇心を向かせる工夫

次に、表 3-6 の講座のねらいにあるとおり、企画においては、科学遊びや、国内外の伝統遊びなど、遊ぶ楽しみとともに、新たな学びへ子どもたちの好奇心が向いていききっかけとなるようなプログラムにする点を心がけている。そのため、セミナーの冒頭ではアイスブレイクとして、各グループに入ったスタッフを中心に全員が自己紹介をし合い、さらに、毎回必ず配布資料や映像などを用いて、講師がその回のテーマに関する簡単な知識提供を行っている。具体的に、たとえば「万華鏡のひみつ」の講師は、万華鏡の誕生の歴史を紹介した後、さらに、その反射の仕組みを、実物の鏡を用いて子どもたち自身にも体験してもらいながら説明した。他にも、「びっくり!大きなかるたで遊ぼう!」の講師は、本講座で使用したジャンボかるたの誕生の経緯を、制作地の岩手県大槌町の地理や方言の特徴とともに子どもたちに紹介した。また、カルタ遊びの最中も、カルタを取る際の「はい!」という掛け声を現地の表現そのままに「でんでん」と言うルールとしたり、子どもたちの中で希望者にカルタの読み手をお願いしたりすることで、方言を声に出し、その響きの面白さ、魅力を実感してもらう工夫をした。

なお、セミナーの配布資料は、受講後にあらためて読み返したり、家に帰ってから作品を作り直したりすることができるよう、講師の学生が、子どもたちに分かりやすく、興味を惹くものとなるよう工夫して作成している(図 3-10)。

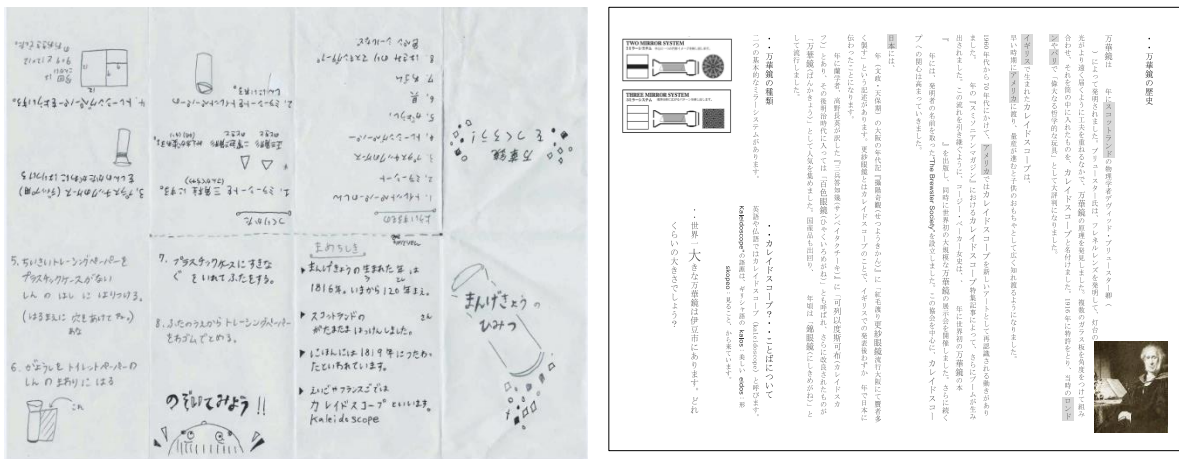


図 3-10 講座での配布資料

## ③個人の活動とチームワークのバランス

次に、図 3-11 は、キッズセミナーのプログラム構成である。前述のアイスブレイクと簡単な知識提供は、本図において「①導入」にあたる時間帯である。どのセミナーもこの図のとおり「①導入」か



ら始まり、「②メインとなる活動」を実施、その後は全員で協力して「③後片付け」を行い、最後に「④まとめ」として、講師と校長から一言挨拶をした上で、事務連絡を伝え、解散という流れをとっている。

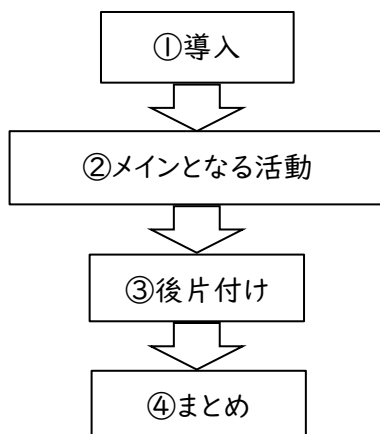


図 3-11 プログラムの構成

このうち、「②メインとなる活動」は、多くが個人単位の活動を基本としている。その理由は、本事業においては、上手にできる、できないに関わらず、子どもが1人で何かに熱中して取り組み、達成感を得ることが重視されているからである。ただ同時に、各セミナーのグループ編成は基本的に異年齢どうしの組み合わせとすることで、普段は接する機会の少ない子どもどうしの交流、学び合いを促す点にも配慮がなされている。

このように、個人の活動とチームワークのバランスを意識して、たとえば、ジャンボかるたのように身体活動が中心の講座では、個人だけでなくチームでカルタの獲得枚数を競い、異年齢メンバーの協力を促すプログラムが組まれた。また、制作系の講座において、スタッフは個人の作業を1対1でサポートする一方、比較的進度の早い上級生には、「もし手が空いていたら、小さい子の様子を見てくれる?」、「(低学年だと)この作業は難しそうだから、どうやるか教えてあげてくれる?」などと声かけをすることもある。こうしたスタッフの働きかけによって、セミナー中、一人ひとりが自分の工作に夢中になる中でも、上級生が下級生の制作を手伝う場面があったり、下級生が上級生の真似をしながら、そこに自分なりのアレンジを加えて他にはない作品を完成させたり、子どもどうしの学び合いの様子が見られた。

## 告知と募集の方法

セミナーの告知については、図 3-12 のようなチラシを大学が制作し、各クラス担任に配布を依頼、保護者への周知をお願いしている。チラシにおいては、講座の内容だけでなく、本事業が行政と大学との連携事業であること、東京大学の学生・院生がプログラム内容を企画し、講師をつとめることを明記している。

募集方法は、参加申し込み用紙に記載された希望講座に丸をつけ、学年、氏名、連絡先（住所、電話番号）を記入し、クラス担任へ提出することとした。また、例年の締め切りは、申し込み用紙の配布から約 2 週間後とし、申し込み用紙は学校でとりまとめた後、大学で受講決定通知を作成、1 学期の終業式までにクラス担任から配布してもらう流れをとった。なお、応募者多数の場合でも抽選はおこなわず、全員が希望の講座を受けられるように配慮した。詳しい受講者数は、2016 年度から 2018 年度までの講座タイトルとともに、表 3-7 にまとめた。

### 東京大学 キッズセミナー2016

8月開催！この夏も、東京大学の学生・院生が「東大キッズセミナー」を開催します。工作やジャグリングなど、いろいろな講座を企画中♪さあ、みんなでチャレンジ！！

<b>22</b> <b>(1)万華鏡のひみつ</b> じぶんだけの万華鏡をつくって、光がとく不思議な世界とそひみつをのぞいてみよう！ 日時：8月22日(月)10時-12時 場所：柏第六小学校(ランチルーム) 対象：小学生(定員20名程度) 参加費：300円 講師：松本家々子 持ち物：上履き・飲み物・ハサミ・トイレットペーパーの芯(2本)	<b>(2)びっくり！大きなかるたで遊ぼう！</b> 昔からの日本の遊び「かるたとり」。今回は特大サイズのジャンボかるたをつかって、みんなでかるたとりをしますよ！ 日時：8月22日(月)13時-15時 場所：柏第六小学校(体育館) 対象：小学生(定員30名程度) 参加費：300円 講師：松尾有美 持ち物：上履き・飲み物・タオル(動きやすい服装で参加してください)
<b>29</b> <b>(3)リフティング王への道～羽けりで遊ぼう</b> 韓国の伝統文化にふれ合い、羽けりを作って体で体験してみよう！ 日時：8月29日(月)10時-12時 場所：柏第六小学校(体育館) 対象：小学生(定員25名程度) 参加費：300円 講師：眞世道(オ・セヨン) 持ち物：上履き・飲み物・ハサミ・新聞紙・お米(1にぎり)	<b>(4)決めるハイトス！みんなでジャグリング</b> ジャグリング道具の1つ、ディアボロ(中国コマ)を友だちと一緒に練習し、ワザをみがこう！ 日時：8月29日(月)13時-15時 場所：柏第六小学校(体育館) 対象：小学生(定員20名程度) 参加費：300円 講師：末光翔 持ち物：上履き・飲み物・タオル

**応募方法**  
 参加申し込み用紙を、クラス担任の先生に提出してください。  
 締め切り：7月8日(金)まで ※応募多数の場合は抽選  
 問い合わせ先：キッズセミナー実行委員会(担当：松山)  
 Tel: 03-5841-1663 Mail: amatsu@p.u-tokyo.ac.jp  
 (当日の連絡先 080-1036-9591)

### 東京大学 キッズセミナー2017

8月開催！この夏も、東京大学の学生・院生が「東大キッズセミナー」を開催します。工作やかるたとりなど、いろいろな講座を企画中♪さあ、みんなでチャレンジ！！

<b>23</b> <b>(1)万華鏡のひみつ</b> じぶんだけの万華鏡 まんげきょうをつくって、光がとく不思議な世界と、そひみつをのぞいてみよう！ 日時：8月23日(水)10時-12時 場所：柏第六小学校(体育館) 対象：小学生(定員30名程度) 参加費：300円以内 講師：松本家々子 持ち物：上履き・飲み物・ハサミ・トイレットペーパーの芯(2本)	<b>(2)ジャンボかるたで遊ぼう！</b> 日本の伝来おもひの「かるたとり」。特大サイズのかるたを使って、みんなでかるたとりを楽しもう！ 日時：8月23日(水)13時-15時 場所：柏第六小学校(体育館) 対象：小学生(定員30名程度) 参加費：100円 講師：山口香苗 持ち物：上履き・飲み物・タオル(動きやすい服装で参加してください)
<b>24</b> <b>(3)身近なものでヒコークづくり</b> ワリバンやペットボトルを使ってヒコークやグライダーを作ってみませんか？作り終わったら、みんなで飛ばすゲームをしよう！ 日時：8月24日(木)10時-12時 場所：柏第六小学校(体育館) 対象：小学生(定員30名程度) 参加費：300円以内 講師：西川昇吾 持ち物：上履き・飲み物・ハサミ	<b>(4)中国の提灯を作ろう</b> 中国のお正月ってどんなもの？伝統のお正月かざり「提灯(ちょうちん)」を作って、中国の文化を体験してみよう！ 日時：8月24日(木)13時-15時 場所：柏第六小学校(体育館) 対象：小学生(定員30名程度) 参加費：300円以内 講師：倉嶋(セン・セン) 持ち物：上履き・飲み物・ハサミ・のり・定規・クレヨン

**応募方法**  
 参加申し込み用紙を、クラス担任の先生に提出してください。  
 締め切り：7月7日(金)まで ※応募多数の場合は2部制にします。  
 問い合わせ先：キッズセミナー実行委員会(担当：松山)  
 Tel: 03-5841-3974 Mail: amatsu@p.u-tokyo.ac.jp  
 (当日の連絡先 080-1036-9591)

図 3-12 キッズセミナーの募集チラシ(2016・2017年度)

表 3-7 各講座のタイトルと受講者数(2016・2017 年度)

実施年度	講座タイトル	参加者数
2016 年度	万華鏡のひみつ	67
	びっくり! おおきなかるたで遊ぼう!	21
	リフティング王への道~羽けりて遊ぼう	33
	決めろハイトス! みんなでジャグリング	26
2017 年度	万華鏡のひみつ	68
	ジャンボかるたで遊ぼう!	32
	身近なものでヒコーキづくり	64
	中国の提灯を作ろう	60

#### 受講後の親子の反応：保護者アンケートの結果より

本事業では、参加した子どもの保護者に対して、受講後の子どもの様子をたずねるアンケートを実施している。ここでは、2016 年度および 2017 年度の保護者アンケートの結果から、セミナーの満足度および、セミナーへの参加をきっかけに親子間の会話が増えたと思うかどうか、親の意識をたずねた調査の結果を示す。

まず、図 3-13 および図 3-14 は 2016 年度と 2017 年度の各セミナーの満足度をグラフ化したものである。これによれば、いずれの年度も、参加者の保護者のほとんどが、子どもは「とても満足していた」、「まあ満足していた」と回答した。

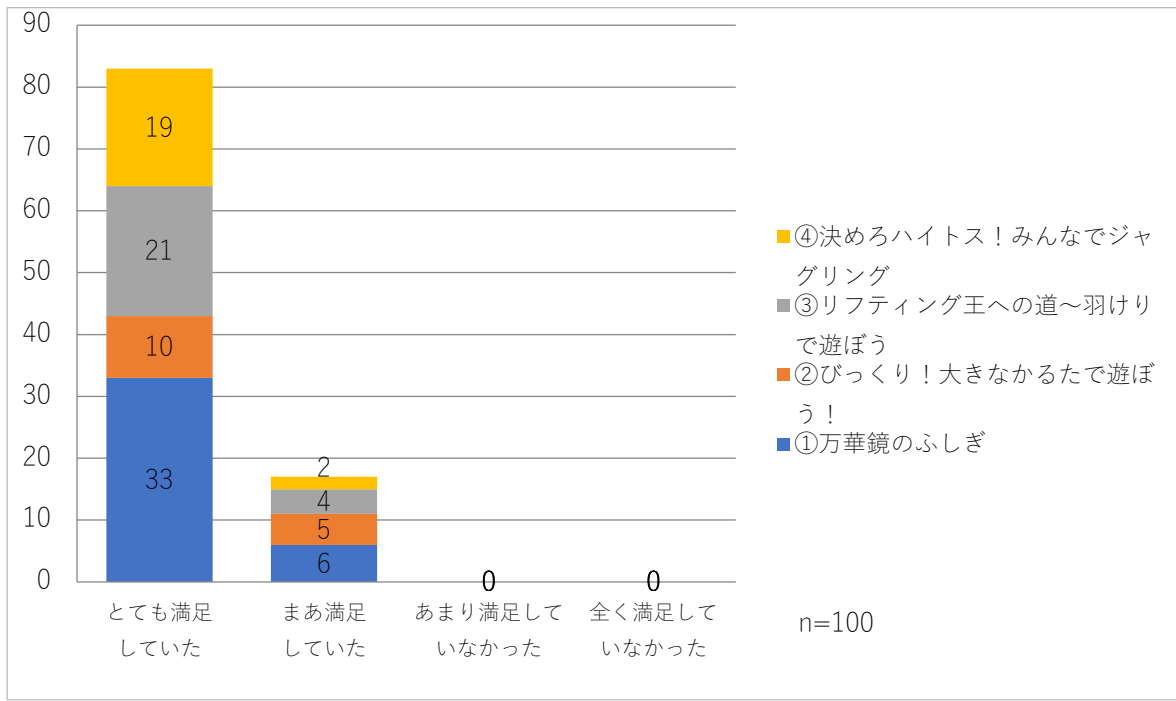


図 3-13 キッズセミナーの満足度(2016 年度)

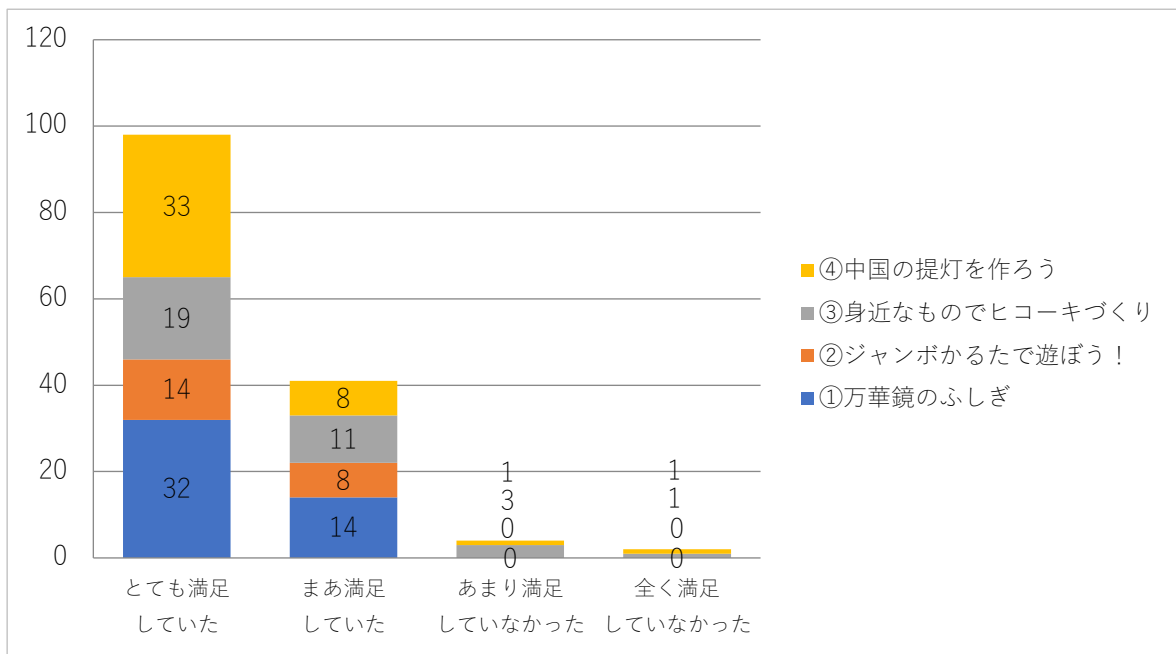


図 3-14 キッズセミナーの満足度(2016 年度)

次に、本アンケートでは、「キッズセミナーの後、お子さんはセミナーでの出来事や体験の感想などについて、家で話していましたか?」、「キッズセミナーののち、親子の会話は増えましたか?」という2つの設問によって、受講後の家での親子のコミュニケーションの様子を調査している。図 3-15 および図 3-16 は、その結果を年度別にグラフに示したものである。

いずれの年度も、家に帰ってキッズセミナーでの出来事や体験の感想を、親に話した子どもが半数以上であった。また、キッズセミナーに参加したことで、親子の会話がいつもよりも増えたと感じている親は、両年度とも41%で、全体の半数近くとなった。

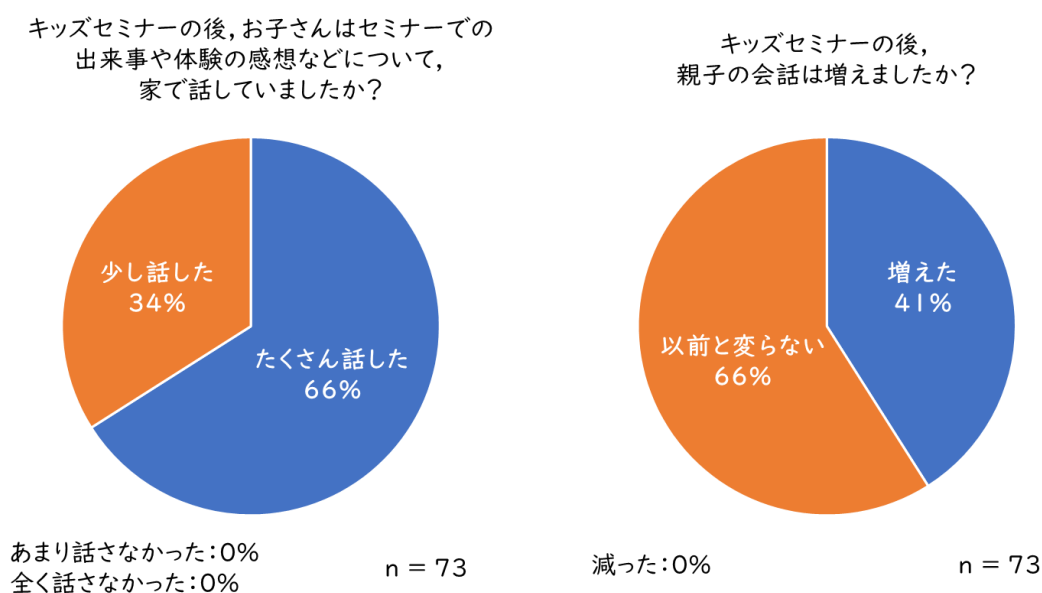


図 3-15 セミナー受講後の子どもの家庭での様子(2016年度)

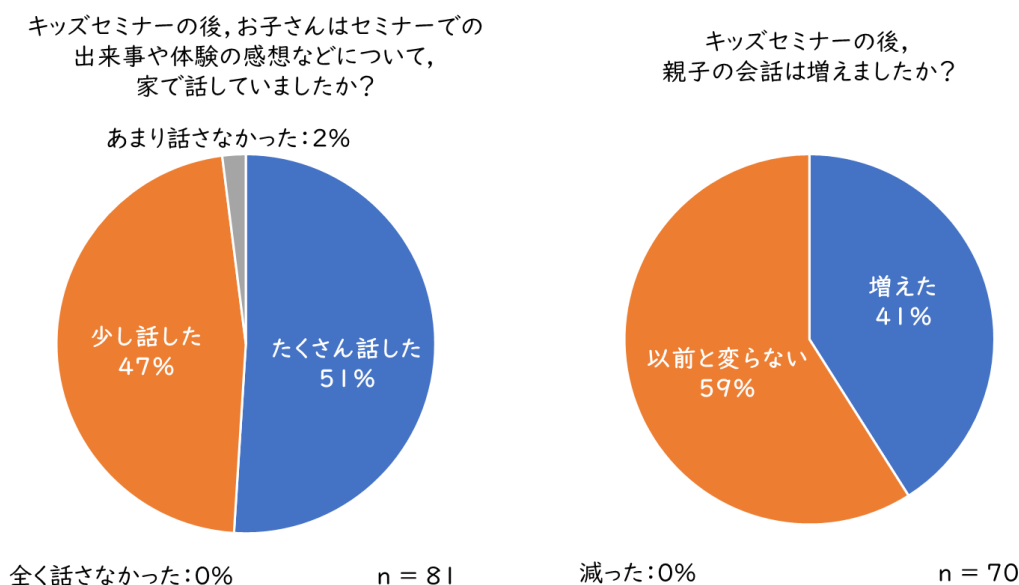


図 3-16 セミナー受講後の子どもの家庭での様子(2017 年度)

最後に、保護者の受け止めの例として、感想(自由記述)の一部を紹介する。これらの感想からは、帰宅後も子どもたちが活動に対する満足感を持続させており、親子の会話や子どもの反応によって、家族内でその感情が共有されている様子が伝わる。また、そうした子どもの姿を目の当たりにすることで、保護者の本事業の実施者に対する信頼感が生まれていることが感じられる。

\*見た目はきれいではないですが、万華鏡のつくりがわかりやすくできていたので、家で再度作ってみたいと思いました。こういう時間を作ってください、皆さんありがとうございました。娘ももっとやりたかったと申しておりました。

\*万華鏡は「人と違う所に工夫したんだよ」と説明してくれました。先生から「すごいね」とほめられ、うれしかったようです。ずっと家に(リビング)に飾ってありますが、思い出するように、たまに、同じこと(工夫した所)を話してくれます。

\*まだ一年生な上、手先が不器用なので工作のような作業は苦勞していたようですが、とても楽しかったと申しております。特にかるたはとても楽しかったようで、大興奮で帰ってきました。また来年もぜひよろしくお願ひ致します。

\*大変にありがたい企画でした。東大生のお姉さんたちは親切で、楽しく過ごすことができました。お礼を申し上げます。

\*信頼のおける各機関の皆様が子どもの為にこうしたセミナーを企画して下さること に感謝します。

- \*セミナー自体も楽しかったようですが、久しぶりにお友達に会えたのも嬉しかったようです。
- \*昨年も参加して楽しかったので、今年も自らすすんで参加したいと言ってきました。来年は弟も1年生になるので、兄弟で参加したいと思います。
- \*カップの中にビーズを入れたり、カラーセロハンを細かく切ったりしたのが楽しかったそうです。ちょっと難しかったけど、お兄さんが優しく教えてくれて、上手にできたそうです。家に帰ってきて、ずっと万華鏡をのぞいていました。
- \*暑い中ありがとうございました。提灯を早速飾っていました。そして、提灯のあかりをつけるのをとても楽しみにして夜を待っています。
- \*今年初めて参加しましたが、来年も本人が希望すれば是非参加させたいです。費用は少々上がってもかまわないので、来年も開催して下さい!!
- \*工作も楽しくできましたが、お茶とアイスがいただけなのが予想外で嬉しかったそうです。学校の先生以外の方に何か教えていただくのも良い経験になったようです。
- \*割り箸の鉄砲は簡単だからと帰宅して自分で作っていたので楽しく過ごせたのかな?と感ぜられてよかったです。
- \*去年も参加して楽しかったみたいで今年も参加しました。クラスや学年の違うお友達と一緒にいろいろ教えてもらうのはすごく楽しく、貴重な体験をさせていただいて良かったと思います。
- \*万華鏡とヒコーキ作りに参加させていただきました。2日間とも、とてもまんぞくして、楽しかった!と喜んでおりました。帰って来たら自宅にある物を使って、また自分なりに改良して、夜寝るときも一緒なほど、大切にしています。とても良い体験になりました。ありがとうございました。

## 子どもとの交流に対する高齢者の反応

ここでは、セミナーの終了後に毎回行っているスタッフミーティングの記録等を用い、シニアスタッフが子どもたちとの交流をどのように受け止めたかを、子どもの生き生きとした表情・態度に接する喜び、子どものもつ可能性の実感、「教える」、「見守る」、「任せる」姿勢への気づきという三点から述べる。

### ①子どもの生き生きとした表情・態度に接する喜び

第一は、子どもの表情や態度に関することである。以下のように、シニアスタッフは、活動中の子どもたちの好奇心に満ちた表情、満足げな様子、目の前の作業に没頭する姿など、その都度表れる子どもの生き生きとした表情や態度に接することに喜びを感じている。また、そうした子どもたちの姿を目にすることに加えて、彼らに感謝されることで、活動への満足感をいっそう高めている様子が伝わってくる。

- \*講師が見本を見せた瞬間、子どもたちの表情が変わり好奇心をはたらかせているのが分かった。
- \*子どもたちは何度も挑戦して、うまく飛ぶようになるにつれ喜びを大きくしていった印象だった。
- \*ロケットが飛ぶようになって満足げな表情をしていたのが印象的だった。
- \*飛行機らしくない飛行機ができて、喜んで一生懸命飛ばしている姿が健気だった。
- \*低学年の子は低学年の子なりに工夫していた。失敗しても何度も作っていた。
- \*子どもは完璧なものを作ることよりも、自分で作れたことの方に嬉しさがあると分かった。
- \*子どもたちの完成した時の喜びの表情を見られること、素直に感謝をしてくれることが嬉しかった。

## ②子どものもつ可能性の実感

第二は、子どもの潜在力に関することである。キッズセミナーでは、たとえば、カッターやのこぎり、きりといった刃物や工具を、子どもが望んだ場合、大人の見守る中で使用する機会をつくっている。このように、学校や家では普段やらせてもらえない、子どもにとって少し難しい作業に挑戦した時、子どもたちの新たな一面が引き出されることが多々あった。以下のとおり、シニアスタッフは、そうした予想外の子どもの姿を目の当たりにしたことで、しかるべき環境を整えれば、子どもは大人が想像する以上の力を発揮できる存在なのだと、その可能性を実感している様子が伝わる。

- \*危険にチャレンジできることにワクワクしているようだった。
- \*まだ習っていない、コンパスを使えるようになった子がいた。
- \*低学年の子で、初めてカッターで切るのに挑戦した子がいた。家では親に使うのを止められているそう。きちんと大人が見てあげられる環境があるなら、子どもの「やってみたい」気持ちを尊重して、少し危険なこと、難しいことでも挑戦させてあげるのが良い。子どももやればできると思う。
- \*子どもでもやれることが沢山ある、子どものすごさを感じた。

## ③「教える」、「見守る」、「任せる」姿勢への気づき

第三は、既述のような子どもの表情や態度、力を引き出す、大人側の姿勢についての気づきである。シニアスタッフが本事業に参加して気がついた点、学んだ点として挙げた内容は、たとえば、大人が「教える」、「見守る」、「任せる」姿勢をバランスよく使い分けて接することで、子どもは本来の力



を発揮でき、活動そのものに喜びを感じられるようになるということであった。以下の引用からは、そうした大人側の姿勢の重要性を、その難しさを含めて実感しているスタッフの様子が伝わる。

\*スタッフは皆、頭から教え込まずに子どもにやらせて見守るという態度を自然ととれていた。そこが良かった。

\*指導し過ぎず、作ることの喜びを実感させてあげることに意義があると感じた。

\*ほめられて嬉しそうだった、子どもの力を引き出すために、褒めることの大事さを感じた。

\*最初に高学年の子を班長にして責任をもたせたことで、グループ作業ではみんなの意見を取り入れてできたことが良かった。

\*低学年では、なにをすべきか分からずに固まってしまう子がいた。満足を感じるタイミングが子どもによって違うのでよく見極めなければならないが、最初のきっかけを与えてあげる方が進むこともあると思った。

\*子どものフォローはやはり先生が上手だった。助けられた。

\*スタッフから、子どもが作ったものに対して、ここが良かったねとほめてあげたり、こうすると良いんじゃないとアドバイスしてあげてくれることを、もっとしてあげられたら良かったかもしれない。

\*見本のモデルを見せたら、ほとんどの子が見本の形になってしまったので、どこまでヒントを与えるべきかが課題。

\*関係ない話をして進度を止めてしまう子などに、どういう態度を取れば良いのか難しかった。

## まとめ

ここまで、2016年度及び2017年度の柏第六小学校の実践を例に、キッズセミナーの活動の全体像を紹介してきた。最後に、学校と地域の連携・協働を進める上で、カリキュラム・マネジメントの視点からどのようなことに留意する必要があるかを述べる。

第一は、地域の資源を活用しながら教育内容や活動を実施していくにあたり、そこに関わる地域住民にとっての活動の意味に目を向けることである。たとえば既述の事例において、キッズセミナーにシニアボランティアとして関わっているメンバーは、子どもとの関わりを通じて喜びや生きがいを見出しており、そのことがもっと子どもと関わりたい、子どもたちのために何かしたいという気持ちを生むことにも繋がっていたと思われる。実際にシニアボランティアのメンバーは地域活動に参加し直接子どもと出会う機会をもつ中で、キッズセミナーだけでなく、学校花壇の整備を子どもたちと一緒にいたり、授業の特別講師を担ったりするなど、継続して教育活動に関わるようになっていた。つまり、活動に関わる地域住民を、教育の質を高めるための単なる「資源」とみるのではなく、双方

にとって意味のある取り組みを模索していくこと、いわば win-win の関係で活動をとらえていくことが、持続的な協働に必要な視点だと考えられる。また、そうした協働のベースとして、単発のイベント等を通じた関わりだけでなく、日常的なコミュニケーションの機会を増やす工夫をし、顔の見える関係を築いていくことも重要であろう。

第二に、地域との連携・協働を意識したカリキュラム・マネジメントを実現していくにあたって課題の一つになりやすいのが、学校ではそもそも地域にどのような団体や人がいるのか分からない、また、実際に協働する上で実務を担っていく者が、学校側にも地域側にもいないといったことである。そのような状況で無理に連携・協働を進めようとする、教員と地域住民ともに負担感が増し、かえってお互いの信頼関係を損なうことにもなりかねないだろう。これに関して、地域との連携・協働を良いかたちで進めていくために、地域の事情をよく知っており、かつ、活動のコーディネート役を担える存在がいるかどうかという観点が重要である。たとえばキッズセミナーの場合は、さまざまな地域の情報をもっている行政や社会福祉協議会などが取り組みに関わっていたことに加えて、大学生が実務の一端を担うことで活動が行われていた。このように大学と連携すること、あるいは地域に関する情報を豊富にもっている公民館などの社会教育施設と繋がること、さらにコーディネートを行う専門人材を配置することなど、ハブとなる存在を置くことが、学校と地域ともに無理のないかたちで活動を実施、継続するために大切だと思われる。

#### 【付記】

本稿は、松山鮎子「大学生がつなぐ地域の多世代交流コミュニティ——千葉県柏市柏第六小学校「東大キッズセミナー」の実践」（牧野篤編『人生 100 年時代の多世代共生：「学び」によるコミュニティの設計と実装』東京大学出版会、2020 年）を改稿したものである。

#### <引用・参考文献>

[1] 中央教育審議会、2015a, “新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）（中教審 186 号）” 文部科学省、2015 年 12 月 21 日。

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/05/1365791\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/05/1365791_1.pdf) (2022 年 10 月 11 日参照)。

[2] 中央教育審議会, 2015b, “新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申のポイント等)” 文部科学省, 2015年12月21日.

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/02/08/1365791\\_2\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/08/1365791_2_2.pdf) (2022年10月11日参照).

[3] 中央教育審議会, 2016, “幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)” 文部科学省, 2016年12月21日.

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm) (2022年12月19日参照).